

前回、4章の終わりのところで3つのことを学んだ。一つは、1万人を超える程膨れ上がった信者の群れも、神とキリストへの献身の「心」と「思い」においては「一つ」であったということ。2つ目は、その一つの心が形に表れたのが、誰も自分の持ち物を自分の物だとは言わないで共有していて、「一人も貧しい人がいない」ようにしていたこと。この生活は神の「大きな恵みが彼ら皆の上にあった」からだということ。3つ目は、その関連で、使徒たちから愛され今後のキリスト教の発展に非常に重要な役割を果たす「バルナバ—慰めの子、励ましの子という意味—」という人物を紹介された。

今日の5章1節は「ところが」と始まっていて、あの素晴らしいバルナバの例に対して、今度は悪い例が紹介される記事のように思われる。

#### 1-2 節

**「ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、妻も承知のうで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。」**

「アナニア」と言う名前は、「ヤハウエは恵み深い」という意味の「ハナニ阿斯」という名前のギリシア語名（使徒9:10参照）。

「妻のサフィラ」とは、口語訳では「サツピラ」となっており、こちらの方が原語(Σαπφείρα)に近い。「サファイア」という言葉の女性形。だから「サファイアのような女、美しい女」という意味。

「代金をごまかし」と訳されている言葉(ενοσφίσατο、エノスピサト)は、本来は、「取り除く」「一部を除く」という意味の言葉。そこから「自分用に取り分ける」、更に、だから「盗む」という非常に悪い意味まで表す幅広い言葉。ここでは、「売った代金の一部を自分用に取り分けた」ということであろう。「その一部」とは、どのくらいの割合なのかは分からない。

#### 3-6 節 ペトロの尋問とその結果

**「すると、ペトロは言った。『アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。売らないでおけば、あなたのもだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。』この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。若者たちが立ち上がって死体を包み、運び出して葬った。」**

「なぜ、あなたはサタンに心を奪われ」たのか。直訳すると、「なぜ、サタンがあなたの心を満たしたのか」という問い。ルカによる福音書22章3節「イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った」と言われているのに匹敵するほどの表現。

だからと言って、この事件の責任は全面的に「サタン」にあるというのではない。4

節に、「**どうして、こんなことをする気になったのか**」という問いがある。直訳すると、「**どうして、お前はお前の心の中にこんな仕事を置いたのか**」という、あくまでも「お前がお前の心の中に」企んだという、やっぱり本人の責任をきちんとある、という追及である。

**「売らなければ、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになった」というか、「自分の権威の下に所有したのではないか」という。**

この文章は、はっきりと、前回の4章34節や37節で出てきた**「土地や家を……売っては……使徒の足もとに」**お金を差し出した人々の例というのは、決して強制的な制度や規則ではなくて、あくまでもその人の自発的な自由な献げ物であったということが分かる。従って、土地不動産の形で所有していようと、それを売って現金に買えて所有していようと、すべて**「あなたの権威の下にある」**もので、自由にできたはずだ、ということがはっきりペトロの口によって明言されている。

#### 7-10 節

**「それから三時間ほどたって、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入って来た。ペトロは彼女に話しかけた。『あなたたちは、あの土地をこれこれの値段で売ったのか。言いなさい。』彼女は、『はい、その値段です』と言った。ペトロは言った。『二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。見なさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、もう入り口まで来ている。今度はあなたを担ぎ出すだろう。』すると、彼女はたちまちペトロの足もとに倒れ、息が絶えた。青年たちは入って来て、彼女の死んでいるのを見ると、運び出し、夫のそばに葬った。」**

**「主の霊」とは、3 節にある「聖霊」のこと。この「聖霊」を「試す」というのは、こういう嘘をついてもどこまで罰を免れ得るか**「試す」**、そういう意味の試み。(なお、「試す」「試みる」ことについては、15 章 10 節を参照。そこでは、エルサレム会議が開かれた時、「**神を試みる**」事件が起こっている。でも、この時は、ペトロは、アナニアたちに対するような処理はしていない。)**

**「見なさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、……」**という言葉は、サフィラがすぐに死ぬということの宣告である。アナニアのところではこれほどの審判宣言はまだなかったが、妻の場合にははっきりそれが宣言される。

このようにして、**「教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた」**(11 節)と言われる。

以上を踏まえた上で、心に残る疑問を取り上げたい。

その一つ目は、ペトロの千里眼のような、あるいは読心術のような点である。

この点については、1 章 24 節に、昇天された主イエス・キリストに祈って**「すべての人の心をご存じである主よ」**と呼びかけたこと、更に 15 章 8 節で**「人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて」**くださ

るというように、この当時の教会は「人の心をお見通しになる」方、「人の心を」読む方は、「主」であり「神」であられる、と信じていた。

そうすると、ここでの記述は、主なるイエス・キリストがペトロたちの中に共におられることの証しかも知れない。

二つ目は、尋問すると同時に、なぜアナニア、またサフィラはパタンと倒れたか。

三つ目は、何故、この時ペトロは、悔い改める余裕を与えなかったのか。

最後に、「三時間ほど」して妻のサフィラが教会に来た時、彼女は何も知らなかったという点。夫が亡くなったのに未亡人の了解も何も取らないうちに、勝手に葬ってしまうと言うことがあるのか。

これらの問いを念頭にこの出来事を再度見ていくことにする。

11 節、結論のところで「**教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた**」というところで、使徒言行録に初めて「**教会、エクレーシア (εκκλησία)**」という言葉が出てくる。このギリシア語は、議員たちを自宅「**から呼び出して**」開く「**議会**」とか「**集会**」を表す。使徒言行録の 19 章 40 節で「**こう言って、書記官は集会を解散させた**」という言葉が出てくるが、この「**集会**」、これが「**エクレーシア**」の一般的な使い方である (32, 39 節)。

旧約聖書では、神の選びの民イスラエルの集まりのことを表すヘブライ語 (カーハール) であり、それをギリシア語訳では二つのギリシア語で訳している。

一つは「**エクレーシア**」、もう一つは「**スナゴージェ**」。この「**スナゴージェ**」という言葉は、「**一緒に行く所**」という意味。

重要なのは、ユダヤ教は、この二つのギリシア語の中で「**スナゴージェ、シナゴーク、会堂**」という言葉を選んで使っている。それに対し、キリスト教の信徒たちは、「**エクレーシア**」というギリシア語を使うようにした。

7 章にいくと、ステファノが説教をする中で、38 節「**この人—モーセ—が荒れ野の集会 (エクレーシア) において、……**」と語る。キリスト者たちは、自分たちはあのモーセ以来「**エクレーシア**」の跡継ぎなのだ、我らこそ神の本当の選びの民なのであるということを、この言葉遣いで主張したようなものである。

アナニアとサフィラという今日の出来事は、このキリストのエクレーシアというものがどういうものであるかということを知る、そういう神学的な主張を持った記事である。

では、この時のアナニアとサフィラの犯した罪とは、何か。1, 2 節では分からないが、3 節のペトロの問い、またペトロとサフィラとのやり取りではっきり分かるように、彼らは、自分用の一部を取り分けた残りの献金を、代金の全額であると偽って差し出した、という嘘つきの罪である。全額でないものを全額であるかのように言って差し出したのである。

しかも、この嘘は、たまたまその場の思いつきとか、あるいは成りゆきのすえ、嘘になってしまったという、そういう嘘ではなく、「**二人で**」ちゃんと「**示し合わせて**」口

裏を合わせた嘘つきであった。9節でペトロが言う通り「二人で示め合わせて」という言葉（συνεφωνήθη、スネポーネーセー）は「シンフォニー」という言葉の動詞形である。「シンフォニー、共に声を合わせて」、口裏を合わせて自覚的意図的に嘘をついた。

では、堂々と“一部は私たち用にとってありますが、その残り全部おささげします”と言えばよいものを、なぜ、全部を持ってきたかのように嘘をついたのか。恐らく名誉欲のためであろう。使徒たちから愛せられたあの「バルナバ」のように、自分たちも教会の中で、あるいは使徒団から一目置かれたい、そういう思いがあったから嘘をついてしまったのであろう。

そもそも、バルナバにせよ、その他の兄弟たちにせよ、土地や家を売っては献げるといふ素晴らしい愛の業を行って、群れの中に誰一人貧しい人がいないようにしていたのは、「神の大きな恵みが彼らの上にあったから」（4:33）である。決して、当時の信者たちの善意からとか信者たちの実力でもってそんなことがやれたのではない。上からの大きな神の恩寵があって、誰一人貧しい人がいない生活が実現できていたのである。

だから、アナニアとサフィラは、この教会に注がれた神の恵み、聖霊の恵み、これを利用して、自分たちもバルナバのように誉められたい、皆から尊敬を集めたい、そういう心があつての嘘だったであろう。

そうであるから、ペトロが言う通り、これは「聖霊を欺く」罪（3節）、「神を欺く」罪（4節）、「主の霊を試す」罪（9節）と言われているのである。神とキリストへの献身の「心も思いも一つにし」ていた「信じた人々の群れ」に対して、二人は裏切った。上からの「大きな恵み」のおかげで誰一人貧しい思いをせず愛の生活を営めた教会、「聖霊に満たされて」力強く福音を宣教していた教会、この「教会」を裏切ったのである。

教会における献金、奉仕もこれに似ている。すべては神の大きな恵みによる。献金ができることも、奉仕ができることも、それができる財力、体力などが神から与えられているからである。人の目を意識して、人々によく思われたいという気持ちでするものではない。

今日の出来事を通して聖書が語っているのは、教会（エクレシア）は、「神の聖霊の宮」（コリント I 3:16）であり、このような教会においては、真実でなければならない、ということであろう。

パウロは、ローマの信徒への手紙 9 章 1 節で「わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りを言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることです」、こう言って語り始めている。あるいは、コリントの信徒への手紙二 11 章 31 節「主イエスの父である神、永遠にほめたたえられるべき方は、わたしが偽りを言っていないことをご存じです」、こう神を証人に呼び出している。人と人との間の問題ではない。少なくとも神の前で、そして聖霊の宮においては、嘘偽りがあってはならない。真実を語り、また真実を行うべきである。